



the Circle Salamander in

第七部

第三十二章 悪意の正体

峯村 明

Salamander in the circle

第三十二章の登場人物

スクナ	……	島の王に仕える者
トヨケ	……	スクナの祖父・タカミムスピー族の長老
コタエ	……	スクナの妹・島の王の妻のひとり
ミツハ	……	水精霊・メッサナの生みの親
メルノ	……	メッサナを逃亡した音楽家

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ヤスウ	学術調査団の団員		ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)
	ダーヴェ	学術調査団の団長		サノヒコ	王に仕える役人
	ヒューダー	学術調査団の団員		フツヌシ	王に仕える者 将軍
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王女付近衛隊長		ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	ヴァリス将軍	レルの父		チドリ	アマセオの妻
	カール	王子 ヘルガの弟		ハマツ	チドリの義父
	ロウナス	國務省の高官		タマシギ	ハマツの奥子
	アンテロ	レルの副官		オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者
	崇政	亡国王の弟		アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟
ヘルガ	王女	マミヤ		ホシナ族の娘	
ケストル王国	パウル	国王		メッサナ市	バンテオラ
	ウルリク	第三王子	メルノ		音楽家
	ヘンリク	ウルリクの息子	バルダリス		メッサナ総督家の一人 臨時総督代理
	ホベオクー	ケストル人の美女	メンドルブ		メッサナ化学者団の代表
	ソルド	闘技場の警備隊長	バラム&バランケ		双子のジャガー バンテオラの部下
黄金門市	皇帝	皇帝	冥界		冥界王
	バイスロイ	皇帝の息子		ベネトナシュ	死神
	パソネル	バイスロイの参謀		テクトリ	最下層ミクトランの主
アンベレオ	ソラン	祭祀長		プラトニオ	メッサナを追放された化学者
	レガリオ	アンベレオ王国の王			

目次

悪意の正体

479.

480.

481.

482.

483.

484.

485.

486.

487.

488.

489.

490.

第三十二章のあとがき

back number

奥付

悪意の正体

479.

太平洋は真ん中あたりの空高く、下界を見下ろすと巨大な雲がゆっくりと渦を巻いている。台風の雲。その北の端が世界の果ての島の海岸線にかかろうとしている。島は今まさに嵐に襲われようとしていたが、ホシナ族が逗留中の火山島はいたって安泰だった。

神の目のごとくその様子を眺めるアマセオの視界に、人が現れた。

「スクナ様」

「うむ。俺を呼んだか」

「はい。早々のお越し、恐れ入ります。ではさっそく、お連れしましょう」

「連れてく？ どこへ？」

「桃源郷へ」

*

場面は一転して山岳地帯に変わる。アトランティス大陸のある東ではなくずっと西方の大陸のどこかだ。地表へと降下していくと川が見えてきた。川辺に小舟が繋いであって、アマセオはそれを指さした。

「船頭はいないのか」、とスクナが尋ねるとアマセオは「どうぞ、ここからはおひとりで」と、にっこりと笑う。

川はそこそこ幅があり、流れはゆるやかで、小舟の先は上流を向いている。流れに身を任せればいいというものではないわけだ。

「俺に肉体労働せいと？ なんのつもりだ？」

「なかなかいいところですよ。きっとお気に召すでしょう」

何気に嬉しそうなアマセオにひとこと言ってやろうと振り向くと、そこにはもう、誰もいなかった。

「なんなんだまったく」

ぶつくさ文句を言いながら、小舟に飛び乗ると、舟はぐらりと傾き、顔に冷たい水しぶきがかかった。長い竹の竿と櫂とが備えてあるが、使い方がさっぱりわからない。瞬間移動も空中飛行もこなす人間には無縁のものだからだ。そこで、ふと思いつき、上流へ向かえ、と念じてみる。二度、三度、熱心に念じると、舟はゆっくりと川岸を離れ、流れに逆らって動き出した。

スクナは満足して舟上でのびのびと脚を投げ出し、周囲に目をやる余裕ができた。

陽射しは心地よく暖かく、鳥の鳴き声が聞こえてくる。そよ吹く風に混じる芳しい匂い。水の匂いではなく馥郁とした花の匂いだ。川岸は緑色の草が茂り、草の間に見え隠れする黄や白の花は水仙、その向こうは――

桃色の花をたわわにつけた木々。桃の木の群生が目の届く限り、一面にどこまでも広がっている。

根元に咲く水仙の精のように、黄や白の小さな蝶がひらひらと舞い、みつばちの羽音。

さほど離れていない本国は台風の季節なのだが、ここはそうではないらしい。

夢のように和やかな景色に、スクナは深い幸福感を覚え、その口からはため息が漏れ

た。

視界がかすむ。涙が溢れてとまらない。うれしいのか悲しいのか。

(ああ、そうか)、かれはなんとなくそう思った。(あまりにも美しいものを目にする
と悲しくなるのか)

480.

(そうはいつでも、いい年こいたおっさんが一人で泣きながら舟に揺られている図……
)

(俺だったらそんなブキミなもん、見たくないが、人の気配がしないし、どうも誰もい
なさそうだ)

ま、誰も見ていないから、いいか、と相変わらずハラハラと涙を落としながら川の流
れに身を委ねる。

(ここへ連れてきたのはアマセオだ……なかなかいいところだとか言ってたっけな……
すると、あやつもこんなふうに泣きながら舟の旅を楽しんだと言うことかいな……)

などと物思いにふけりつつ、ふと川岸に目をやれば――

そこに佇む老人と目が合った。甘い香りの桃の木立のなかに佇む白髪白鬚の老人――

スクナは反射的に立ち上がった。そのはずみで舟は大きく傾き、彼は川の冷たい流れ

の中へ、ぱっしょん、と放り出された。彼が驚いたのも、無理はない。その老人は。

「お、おじいさま！！」

481.

「やれやれ」

老人はつぶやきながらいそいそと枯れ枝を集め、川岸に積み上げ、そこへ曲がりくねった杖の先を差し向けると、ぽっと火が点った。慣れた手際だった。

スクナがそう指摘すると、

「そこの川を舟でのぼってくる者らは、わしの姿を見つけるとたいてい仰天して舟をひっくり返し、川に落ちる。そのたび、こうして火を熾して温めてやるのだよ」

(そりゃあ、麗しい桃の木の下にひなびた老人がこっそり佇んでこっちを見てれば幽霊かと思うわなあ。いや、仙人か)

川辺にあがってもまだ胸はどきどきとし、ぞわぞわと身震いがする。彼は泳げないのだった。

「寒そうであるな。どれ、これを貸して進ぜよう」

スクナは老人を見た時からずっと気になっていた。なにかの植物で染色したらしい薄地の着物は袖も裾も擦り切れていて、いかにも年季が入っている風情なのだが、老人は着物の上に袖なしの黒い毛皮を羽織っていたのだ。それは見るからに豪華で、手渡されてみると、ふかふかと軽く、柔らかく、温かく、そこはかたなく上品である。思わず、おお、と声が出る。

「……これはまた。すてきなちゃんちゃんこ……」

どう見ても熊や鹿のではない。どこか異国の動物なのだろう。

「もらいものじゃ。じゃぐわあーる、という動物の毛皮だという」

じゃぐわあーる……じゃぐわあーる……？

不思議な響きのその言葉はスクナの記憶を刺激した。どこかで聞いた気がする。どこだったか――

さあっと血の気が引いた。

ミクトランに漂着した際、ケガをした彼を背中に乗せて運んでくれた動物！

あの時の手触りがまさにこの毛皮と同じだった！

あの動物はネコの一種で、ジャガーというのだった！

482.

「もらいものですと！？」

「うむ」、老人は焚火に手をかざして言う。「西方の商人がな、このくにの都に持ち込んでおるそうな」

「西方から？」

「そうじゃ」

スクナの胸騒ぎは収まらない。今手にしているのは、背中に乗せてくれたジャガー、バラムではないかという懸念で。

「かつてなかったことじゃ」老人は物思わしげにつぶやく。「かなりの年月を生きてきたわしじゃが、このようなものを、見るも触るも初めて。都で買い取った者は大枚を投じたという」

「高値で取引されていると……」

「うむ、ひじょうに珍しいものなので都の貴族らの間で大評判になり、値は果てしなく吊り上がり、なかなか手に入らぬらしい」

そんな希少なものをあっさりもらってくるとは、さすが、トヨケおじいさまである。もしかして、とスクナは、これを見せびらかしたくて俺を呼び寄せたのではなかろうかと、ちらと疑う。

「それにしても、解せん。なにか、おかしいことが起きている。西方で」
老人の手に、きらりとなにかが光った。

「おじいさま、それは？」

「ふむ。国守が大事に隠しもっていたので、こっそり拝借してきた。今頃青くなって家探ししているだろう」

「あの、見せてもらっていいですか??」

老人は黙って金貨を手渡した。手のひらに乗ったそれは重い。

金貨の片面は三角形の上半分がない、階段状ピラミッドのシルエット。金貨の円周にそって細い蛇がうねっている。

もう片面は、人物の横顔。こちらの円周に蛇はいないが、かわりに文字が刻まれている。"ベレオーサ"、"今年の年号"、それから、"神の代理人"、と。

483.

スクナは絶句した。この人物は——イリチャか、さもなければ、ミツハではないか！

「そなたも、そう思うか」

「は？」

「それに刻まれている人物は、あの娘」

「おじいさまはミツハをご存知なのか！？」

「知らいでか。あのよう大きな力を持つ者、わしの目にはひとめでわかるわ」

「うう」

「スクナよ、そなたがあこの娘を世界の果ての島へといざなつたのじゃな」

「ええまあそうです」彼は嫌な予感を覚えた。なにかとんでもない間違いを犯してしまつたのではなからうか——

「情けない顔するでない。そなたを責めているのではない。ただ、そなたはあの娘の正体を知らぬ」

「ミツハの正体？」

「その金貨に"ベレオーサ"と刻まれている。元はメッサナといったがな。あの娘はメッサナの産みの親」

「はあ？」

「あの娘が種を蒔き、育てた。ただただ、人間のためにな」

「……………」

「そのメッサナを、ベレオーサが乗っ取つた。黄金郷もろとも。その金貨はベレオーサの力を見せつけるためのものだ」

「で、ですが、おじいさま、えーと、ベレオーサの力を見せつけるための金貨に、なん

で、メッサナの産みの親たるミツハを刻むのです！？ 刻むんだったら新しい支配者の方じゃないですか??」

「それがわからん。じゃぐわあーの毛皮を持ち込んだのもベレオーサの商人だという。思うに、メッサナの時代に門外不出だったものを放出したということではなかろうかな」

「毛皮を剥ぐなどと！ 信じられませぬ！ 獣の姿をしていても彼らは偉大な存在で、こんな私にさえ親切にしてくれたのだ！」

「そうじゃ。信じがたい、おかしなことがかの地で起きているのだ」

「おじいさま。この金貨、しばし私に貸してくださいませぬか」

「……どうするのじゃ」

スクナはぐっと金貨を握り締めた。

484.

世界の果ての島の荒々しい溪谷の淵は水の音が跳ね返り、会話には向かないが話を盗み聞きされる心配も少ない。ここではスクナの甥っ子オモイカネがどこで聞き耳をたてているかわかったものではない。密談には最適である。そこでスクナは念を入れてミツハと想念を交わしあった。

(そなたが何者か、俺は知っている。メッサナの生母よ)

(……遠い昔の話です。私はその最初の衝動をもたらしただけ……)

(そなたにとっては昔の話かもしれぬ。だがメルノにとってはどうなのだ?)

(……………)

(そなたとメルノは別々の存在なのだろう?)

(メルノはメッサナのなにかもを失い、忘れました。かの地にはなんの感慨も未練も
ございません)

『メッサナの生母』という言葉にメルノは驚いたが、自分を救ってくれたのがそのよう
な存在だったのだと知って、むしろ大きな安堵感を覚えた。

(そうか。ミツハどのも、メルノも、もはやメッサナには関わらぬと、そういうことだ
ろうか)

(さようでございます)

おもむろにスクナは懐から取り出したものを親指と人差し指の間に挟んで、ミツハの
眼前にかざした。それは叢雲の間から漏れる月光を弾いて金色に輝いた。

ミツハが見せられたのは階段状ピラミッドのシルエットが彫られた面だ。彼女の目が
揺らいだ。

(これは——メッサナ総督府?)

(ほお、この台形のような形のモノは総督府というのか。では、これは?)

言下に金貨をくるりと裏返す。するとミツハはまじまじとその面を見つめ、「よく、
見せて」、と手を伸ばした。

「これはなに? ベレオーサ? 今年の年号……神の代理人??」

「この人物はそなたではないのか？」

「そんなわけありません！ 私がメッサナに関わったのはもう何千年も前のこと。それに、このベレオーサって——？ なぜメッサナ総督府の裏に——？」

ミツハは目を大きく見開き、早口でまくしたてた。彼女らしからぬ感情の表出だった。それはミツハとメルノとの相乗作用であったかもしれなかった。

485.

数か月前にメッサナ市が封鎖される事態となった。陸上はもとより、空からも地下からも、メッサナ市に出入りできない。電波の通過もできない。物質次元のみならず、メタ次元においても同様。完全に孤立した状態となったメッサナ内部ではなにか異常なことが行われているのだと、スクナは語った。その証拠の一つが西方の国で出回っているジャガーの毛皮である。

「ジャガーの毛皮！？」ミツハ - メルノは同時に叫んだ。

「なぜそんなことが！？ ジャガーは人間の友人です！ まだ街の形も定かでなかったころ、彼らは自ら、そうあろうと、申し出てくれたのです！ メッサナの歴史は彼らのものでもあるのです！ 彼らの毛皮を、売る！？ そんなバカな！！」

「ベレオーサがメッサナを乗っ取った。ベレオーサの商人が毛皮を外国に売りさばいている」

「ベレオーサ……？」

「なんでも、アンベレオ王国の氏族のひとつだそうだが」

「聞いたこともございませんわ」ミツハはにべもなく切り捨てておいて、「けれども……ジャガーたちはもとより、住民たちは……」、と、眉を曇らせる。それから指先を口元へ持っていき、黙り込んでしまう。土をいじったのか、指先は荒れていた。

「ミツハどの、もうひとつ、指摘したいのだがな」

「はい？」

「その金貨に刻まれている人物、そなたではない、のでは？」

いわれてミツハは、はた、と金貨に目を戻した。「……どういうこと？」

「過日、そなたに世話になった際、エウメロスの王女を送り届ける途中だったもので、詳しい話ができなかったのだが、実はミツハどの、俺はミクトランでそなたの子息に逢った」

え、とミツハは目を大きく見開いた。

「俺は王女を伴いふたりでミクトランを脱出した。そうだ、メルノよ、エウメロスの指導者である王女を脱出させるよう口添えしたのはバイスロイ氏だよ。そのときに例の伝言を頼まれたのだった。それはともかく、俺たちがミクトランを出たあと、残った彼らがどうなったかはわからぬ。わからぬが……この横顔の人物は、ミツハどの、そなたの子息ではなからうか」

ミツハはじっと金貨を見つめ、「私たちはそんなに似ているのですか？」とつぶやいた。

「似ているどころか、そっくりだ。エウメロスの王女も口には出さなかったが、そのことをたいへん、気にしていた」

「これが……息子なら……」 「ちょっと……待って……」

眉間にしわをよせた険しい表情で、ミツハは考え込んでしまう。

486.

ぱらぱらと雨が落ちてきた。ときおり生暖かい風がごおっと吹き抜け、ミツハの黒髪を乱す。それはそのまま、彼女の心の乱れを表出するものでもあった。

かつて神々に取り上げられた息子。火精霊と水精霊の間に生まれた子を神々は危険視した。

異なる種同士の婚姻は神界において禁じられていた。その子は両親の能力を増幅して爆発的な力を所有するからである。じっさい、ミツハの子はまだ乳幼児だったときにむずかかって泣き、暴れ、そのあげく世界をひとつ燃やしてしまった。自ずから危険な力を持っていることを証明してしまったのだ。

それゆえ、神々はミツハの手から幼子を取り上げた。いったん彼女がつけた名前も、その記憶も。幼子は神々によって円弧に封じられ、いずこかへ送られた。

ミツハが知っているのはそこまでである。無力な水棲動物に姿を変えられ、円弧に閉じこめられた息子が虚空に消えて行くのを彼女は凍りつく思いで見ているしか、できなかった。

その息子が生きている。そう知ったのはスクナによってであった。驚くほど彼女に似ているというその少年はイリチャという名を持っていた。神々の閃光という原意をもつその言葉に、ミツハはどれほど慰められたことか。そのことによって彼女は生きる希望を見出したのである。

メッサナという都市の生誕と成長は、息子を奪われたミツハの哀しみと苦しみを忘

れさせるものだった。彼女はひんぱんにメッサナを訪れ、成長と繁栄を喜んだ。メッサナは健やかに成長し、すっかり大人になった。世界中から人が集まり、また散っていく。多くの人の拠りどころとなり、支えとなり、自立したメッサナは己のことは己で解決できる存在となった。

もはや、生みの親など、必要としないだろうと、ミツハはメッサナから身を引いた。

そしてあの日。

久方ぶりにメッサナを訪問しようとした、前の晩。ミツハは底なし沼に呑まれるメルノと出会ったのだった。

なにがしかの異変がメッサナに起こりかけていることは察せられたものの、異常な事件に襲われたメルノも捨て置くことはできなかった。そしてどんな異変が起ころうと、己で解決できるはずだと、彼女はメッサナを信頼していたのである。

487.

沼地でメルノを拾い上げたあと。彼女は、猛烈な攻撃を受けた。ヤスウがもうダメだと観念したほどの猛烈さだった。混乱と絶望のなかでヤスウが放った救難信号にスクナが応じて駆けつけてこなければ、どうなっていたか。思い出すだけでぞっとする。

ぞっとしたくはないが、あれはいったいなんだったのだろうと思ひ出さずにいられない。だが、あの記憶の輪郭にそうっと触れただけでメルノは絶叫を放った。

憎悪と侮蔑をはらむ拒絶の目が自分を見、彼らがあげているのは激しい怒号と口汚いヤジだ。

観衆のまなざしと発せられる声に体を引き裂かれる。信じてきたものがいっせいに向こう側へ行ってしまった。こっちには誰もいない。大勢の冷たい眼差しの下に己の尊厳のすべてを引きむしられ、踏みにじられる。恥辱と絶望の乾いた泥沼。叫ばずにいられない。叫ばなければ——壊れる。気が狂う。

叫んでいるのはメルノだがミツハもまた混乱に引きずり込まれそうになり、必死の気力で踏みとどまろうとする。

メルノ！ 落ち着いて！ これはただの記憶、過ぎ去ったことだわ！ 今は誰もあなたを傷つけたりしない！

しかしメルノの叫喚は止まらない。両手で髪を鷲づかみにし、頭を打ち振り、幼児のように身も世もなく地団駄踏んで絶叫し続ける。

おとなしやかなミツハの外見が曝す狂態にスクナは度肝を抜かれてしまった。彼もまたなんとかなだめようと、手を出したり引っ込めたりと、おろおろするばかりである。

(いや、待てよ)

スクナは空気を引き裂く凄まじい女声にへきえきしながら懸命に考えを巡らせた。

(ついさっきまで遠感によってミツハと接触できていた……)

そう気づいたスクナは遠感の触手をミツハに向けてみた。(これでどうだ？ ミツハを通じて内側からメルノを——)

ところが——

泣き叫んでいるのはメルノだけではなくだった。ミツハもだった。メルノを揺るがした記憶の大浪はミツハの脚をもさらってしまっていた。

スクナはミツハの精神に踏み込み、彼女らふたりが時空を超えた異なる悲哀と苦悩の痛みを共有していたことを知ったのだった。

488.

無数の視線を感じる。困惑と哀れみ、蔑みと同情、憎悪と嫌悪、侮蔑と拒絶……ほんのわずか、寄り添おうとする感情が混じっているのを感じるだけに、あらゆる負の感情が際立つ。他者の負の感情が渦巻き、突き刺さり、彼女らを囲繞する。

やめてくれ

気がふれてしまう——やめてくれ——

助けに飛び込んだつもりが、逆に足を取られてしまったスクナだ。

彼女らの記憶はいまやいっせいに立ち上がって、甦り、縄をあざなうに絡み合い、スクナをも巻き込もうとしていた。スクナは一瞬のうちに彼女らの過去を追体験した。それは遠感能力を持つ者なら決してしたいとは思わないことだった。負の記憶とはその持ち主を侵蝕し、歪め、破壊してしまう。そのおそれのために、負の記憶は潜在意識のなかへ封じられ、忘れる。生きるためには忘れるしかないから。

生暖かい風が吹きつけ、雨が降りだしてきたが、スクナたちを襲っているのは泥沼であり巨浪だった。

スクナは泳げなかった。まさに悪夢のなかで、なり振りかまわず叫んだ。助けてくれ、と。

489.

いつしか——スクナは仰向けになっているのに気がついた。ああ、と彼は思った。こうして力を抜けば水に浮くのか。

そして気がつけば浪が納まっているようだ。徐々に、水が引いていく。やがて固い地面を背中に感じ……誰かが振り向いて彼を見ていた。誰だっけ？

彼はがばと跳ね起きた。「コタエ！？」

「気がつかれましたか。兄上」

「なんでおまえが！？　ここはどこだ！？」

「助けてくれと、私を呼ばれましたでしょ？　ここは木こりが仕事用に使っている山小屋です。だいじょうぶ、私たちのほかは誰もいません」

云われて見れば簡易な造りの小屋には小さな囲炉裏が切られていて、火が燃えていた。囲炉裏の傍に、火にあたって濡れた着物を乾かしているミツハがいた。

「スクナさま」、とミツハは申し訳なさそうに言った。「よかった、気がつかれて。さ、火のそばに」

ミツハはすっかり正気に戻っていた。メルノも落ち着いたのだろう。あの狂乱がウソのようだ。

コタエはミツハの手を両手ではさみ、静かにさすっていた。コタエが相手の心身の不調を緩和しようというときに行う仕草だ。どちらも黙っていたが二人の間に交流がされていることを感じたスクナは口を挟まなかった。うっかり踏み込んでしまって溺死しかけ、妹に助けをもらおうという体たらくを演じたばかりだ。コタエは冒険家であるだけでなく優秀な治療士でもある。まかせておいて、心配ない。

*

(辛ろう、ございましたな)

いきなり現れた初対面の女性に心の中を洗いざらい見られ、メルノの方は反感を覚えなくてもなかったが、コタエの念波は驚くほど柔らかく、しなやかで、心の内に生えかけた棘はみるみる消え失せた。まるで似ていないがスクナとは兄妹の関係だということもメルノの警戒心を無条件に解いた。スクナはそれほど信頼できる存在となっていた。

メルノは長いことコタエと語りあった。

己がミツハという存在に重なり合うか組み込まれていることを薄々感じてはいたが、この日初めてそれが事実であったと認識したのだった。さもないと、メルノの精神はとうに崩壊していただろう。

490.

「あの時メルノを襲ったのは何者か、考えたのです——はじめは“あの男”かと思ったのですが——」

「“あの男”??」

「スクナさま覚えておいででしょうか、アマセオさまの戦いの時です、シトリ族のタマシギという男に死神がとり憑いていた。死神は大カラスの姿をとって逃げ去りました」

「——そうであった！」

「憑かれたタマシギが様々に物事を画策できたように、あの死神はたいへん力の強い者であったのです。けれど、力の強さを帳消しにするほどムラ気で、計画性がなく、することなすこと行き当たりばったりの低次妖怪。敵対すればたしかに恐るべき相手ですが、力があるというだけ。知能はきわめて低いのです」

(……えらい云われようだな……)

「ひとことで言ってベネトナシュ……死神の名です……は、面白がりやなのです。ものごとを複雑に、面白くしたいがために、様々に画策し、混乱を招きます。人間の世界にどんな影を落とそうがおかまいなし。彼にしてみれば翻弄される人間を見るのが面白くてたまらない。きわめて悪趣味。それがベネトナシュ。
なのですが、メルノを襲った者は、それとは違うという気がいたします。もっと——
もっと悪意に満ち満ちている——」

「死神より悪いやつである、と！？」

「あの、よろしいかしら」

黙って耳を傾けていたコタエだ。

「ずっと忘れていたのですが、ミツハさまのお話で思い出したことがございます。エウメロスのヘルガ王女さまをお助けするべく、ケストル王国へ赴いたときのこと。ヘルガさまはひじょうに強力な魔法をかけられていて、ほとんど廃人のような状態だった。さいしょはケストル王のしわざかと思いましたが、探りをいれてみれば、ケストル王は単に通路にすぎないとわかった。何かが、ケストル王の向こうにいた。その何かは——
悪意に満ち満ちていました」

「コタエ、妹よ、メルノとヘルガ王女を襲ったのは同一のモノだということのか？」

「それは何とも言えませんわ……」

「ええ、今の段階では何とも言えない、私もそう思います。けれど、私はメルノが受けた攻撃を傍受したわけですが、なんといいですか、人間的な印象を受けました。とても、生々しいどろどろした感情だったのです。いかがでしょう、コタエさま？」

「ああ！ 私は冷たく乾いた悪意を感じたのです！ 無機的な悪意。アレは人間ではありません！ ミツハさまが受けた印象と、まったく異なりますわ！」

ミツハとコタエは顔を見合わせ、スクナはそんな二人の美女を眼福に思いつつ眺め、つぶやいた。

「どういうことだ？」

第三十二章 『悪意の正体』

第三十三章へ続く

第三十二章のあとがき

物語は第七部に入りました。

なんですかね、話がどんどん思いもよらない方向へ進んでいく……コントロール不能……いったいいつ終わるんだらう……

さて、今回のあとがきはですね、スクナのおじいさま、トヨケについてです。

ホツマツタエによると、トヨケはアマテルの母方（イサナミ）の祖父であり、スクナの父方（ヤソキネ=6代タカミムスビ=カンミムスビ）の祖父でもあります。

『纏れば “廻みの トヨケ尊” 東の君と 道 受けて 大嘗事も 真榊の 六万に継ぎて』4文

トヨケは最初、ヒガシノキミ（東の君）としてトコヨ尊の皇統を受けた。遂にはオオナメゴト（大嘗事）も真榊の6万の時に継いだ」

『トコタチの 八方を恵りて 西の地 クロソノツミテ “カ” に当る 名も赤梟の トヨクヌ 代々治むれど 年を経て 道 尽きぬるを ウケステメ ネの国に来て タマキネに よく仕ふれば』15文

クニトコタチが八方を巡った西の地をクロソノツミテ（玄圃統みの地域・中国の伝説では崑崙山の上）という。これは、ト・ホ・カ・ミ・エ・ヒ・タ・メの“カ（西・夏）”に当たる場所である。（“夏”は史書に記された中国最古の王朝）

その名はアカカタ（赤梟）といい、トヨクヌの子孫が代々治めていた。しかし、年を経るにつれて和の道が忘れられ、とうとう尽きてしまうかのように思われた。そこで、和の道の根絶を憂いたウケステメ（西王母）は、ネの国（現在の北陸、中国地方）のタマキネ（トヨケの齋名・東の君）に仕えることにした

『御代もゆたかに治まりて やよろとし(8万年)へて ふそふすす めもみゑはつに(22鈴505枝1穂の初め) ミヤツより 早雉 飛ばば アマヒカミ 急ぎマナキに 御幸なる』6文

トヨケは本来ヒタカミ（現在の東北地方）を統治していたが、のち、ネの国に移り、マナキ（宮津・朝日原）で亡くなった。アマテルは祖父危篤の知らせに自ら馬に乗って駆けつけた。（余談ですが、間を置かず、イサナギがアワヂノミヤで亡くなっている）

『妹ウケステメ アカガタに クロソノツミと 生む御子を 転日つ国（日が沈む方向の）の 君となす』24文

神仙の世界には仙薬があって、それを飲めばだれでも長生きできると考えられていた。仙薬は西の崑崙山に住む西王母が持っており、また、東方の海に三神山（「蓬萊（ほうらい）」「方丈」「瀛州（えいしゅう）」）があって、そこに住む仙人が持っていると言われた。

東王父は、東王父、東王公、東君、木公、これらの表記がある。東方・太陽・男性を表し、中国から見て東にある大海中の山（蓬萊山）に住んでいる。

古くは殷の卜辞に“西母”との名が見られ、その姿は書によってまちまちだ。西王母が、東王父あるいは地上の王者と交渉や交流をするという伝説が、中国にはずっと流れていた。

中国の伝説上の女神・西王母が師事していたのが東王父、トヨケなのだった。

トヨケの後継ヤソキネには千五百人の子供がいたといわれます。確実に妻だとわかっているのはココリ姫（イサナギの姉か妹）だけ。奥さんはひとりじゃなさそうです。ヤソキネの子として系図にあるのはスクナを含めて四名だけですが、もしかしてこの四名はココリ姫の子かも？

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買って、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門市の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらしした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章 メッサナの黄金郷』

ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチャについて情報を交換し合う。スクナはその見た目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチャの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチャとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。

かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチャの母親は水の精霊である。

一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの王家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章 物質化した太陽光線』

黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……

しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

『第二十三章 ミクトラン脱出』

ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。

ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

『第二十四章 トーラの鷲の園』

ヘルガはアマノカガセオによって大陸中南部の森林地帯へといざなわれる。陸上からはとうていどり着けない険しい地形のなかに現れた湖に浮かぶ島・トーラで、ヘルガは去る大災害の直前にケストル宮廷から退避したはずの家臣たちと再会する。そこは掘削中の地下道がいずれ到達する地、出口でもあった。

一方、ミクトランに残った一行の巨人族探索は遅々として進まず、仮面の怪物の執拗な攻撃に手を焼いていた。怪物群の攻撃を一手に引き受けているイリチャに、戦いを宿命づけたかのような名づけをしたことにヒューダーは責任を感じていた。

『第二十五章 イリチャの行方』

ヘルガからの贈り物である指輪を追ったイリチャは死神ベネトナシュの手に落ちた。しかし、ミクトランの主・テクトリが横取りする。わけもわからず嘲弄されるイリチャだが、巨人族が造られる現場をついに目にする。そこはミクトランの中に作られた異次元空間で、製作者はメッサナを追放された化学者プラトニオ。評議会の爆弾が巨人族を殲滅すると同時に地上のあらゆるものを汚染したことがわかると、テクトリもプラトニオも慄く。評議会の爆弾とは、メッサナが封印していたきわめて危険なものだったのだ。そんな彼らの前に現れた男が巨人族製造を弾劾したことによって巨人族問題は集結しそうにみえたが、地上を汚染したのが地上の人間であると知ったイリチャは激しく落胆する。

第六部

『ジャガー狩り』

ミクトランで行われていた巨人族製造はある人物の一声で打ち切られた。ミクトランは冥界から切り離され、ダーヴェたち三名はイリチャの懇願により地上のメッサナへと送られた。巨人族の危機が無くなり、ミクトランを脱出できたことよりも、その急転直下の転換ぶりに三名は戸惑う。なによりイリチャが謎の人物に連れ去られてしまった。彼らは敗北感と無力感とに苛まれる。

メッサナの前の提督パンテオラを飼い主としていたジャガーのパラムとバランケもあるじを失った現実と直面し、失調し始める。そんな折、メッサナ中のジャガーがすべて集められ、くにが管理するという通達が発表された。

『第二十七章 仮面の神』

黄金門の後継者バイスロイは身分を隠したままメッサナの街中に出、メルノの生家跡でアンベレオの女先遣隊長シパドと出会う。バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受けたシパドは、彼に記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。ヒューダーたちは出かけたまま戻らないバイスロイを心配するが…

メッサナ市奪還に湧き返る王都だったが、王場内には緊張が走っていた。アンベレオが信奉する神が、その代理人を送り込んできたのだ。そして記念硬貨に彫られるべき人物は、国王から神の代理人へと変更になった。

バイスロイはモデルである神の代理人と対面する。

『第二十八章 9かける3番目の王国』

メッサナ市奪還記念硬貨に刻まれる人物とはイリチャだった。かつてメルノが歌った歌を耳にして動揺するイリチャだったが、かえってバイスロイに対して心を閉ざしてしまう。

モデルのデッサンを携えてメッサナに戻ったバイスロイは、女先遣隊長シパドが新たな総督として就任することを知る。シパドは本来彼女のベレオーサ家のものだった土地を取り返し、治めることを当然と考えていた。そして二日後の就任式の折り、バイスロイに夫として、隣に立つよう求めるのだった。

古い昔話『9かける3番目の王国物語』には王と別れた后が特徴のある指輪を持っていたことが描かれている。それと同一と思われる指輪を持って現れたイリチャ。彼が金貨に刻まれたことはいったい何を意味するのか。

『第二十九章 ベレオーサ市の惨劇』

新総督就任の日、シパドはおそろしいことを企んでいた。衆目のなか、巨人族にケストル人ソルドらを襲わせたのだ。バイスロイに求婚を断られた腹いせだった。新総督お披露目を見物にきた市民たちはシパドの残虐な性格を知り、眼前で繰り広げられた惨劇に恐怖に慄く。ダーヴェェやヒューダーの衝撃はさらに大きい。ソルドたちを襲った巨人に見覚えがあった。

アンベレオは巨人族を商売に利用できると考えていた。それがアンベレオの思惑だったのだ。

しかし総督就任の儀式を血で汚したことは本国の怒りを買い、シパドは呼び出しを受けアンベレオへ向かう。王家から厳しい叱責を受けたシパドの兄・ドゥルは妹に激怒し、同行してきたバイスロイを深夜の王都へ放り出してしまふ。

『第三十章 金星の巫女』

旧メッサナ市の住民は新総督就任の日に見せつけられた恐ろしい光景に深く傷つき、新総督への反感を持ってないほど委縮してしまった。そんななか、マミヤは金星神への祈りを捧げるために神殿へ向かった。

同じころ、バイスロイが身に着けていた黒曜石の短剣が金星神に関わるものと知ったシパドは仕返しを企む。

一方、世界中に広がるネウトラ評議会加盟国は、ネウトラ・ポリス消失と評議会職員の安否の説明を求め、世界に向けて声明を発した。アンベレオはその声明を盾に、新ベレオーサ市滞在中の評議会員全員の出頭を求めた。ポリス消失の経緯を知るダーヴェェとヒューダーは出頭要請に応じようとするが……

金星神の神殿に詣でていた者全員が当局に捕らわれるという事態が起きた。それはさらなるバイスロイへの意趣返しを企むシパドの仕業。神殿にいたマミヤはその網にかかってしまふ

『第三十一章 ボムソワールの劇場』

シパドのバイスロイに対する執着は、彼に黒曜石の短刀を与えたというマミヤへの激しい嫉妬を産んだ。そのことにマミヤはただただ困惑し、あらためてヒューダーへの想いを確かなものにする。

シパドはマミヤへの意趣返しを思いつく。バイスロイを初めて見たボムソワール家の焼け跡、そこに隣接する野外劇場を使って、衆目の中、マミヤを辱めようという。そしてマミヤを襲うのは旧メッサナ市民から取り上げた、彼らの友人、ジャガー。ジャガーの集団のなかにバラムを見出したマミヤは彼に手を差し延べ、両者は心をかよわせる。

奥付

Salamander in the circle

第三十二章 悪意の正体

2024年2月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
